

「このおじさんは誰だろう？」

7歳くらいだっただろうか、おばあちゃんの家飾られている1つの遺影に疑問を持ったのは。他に飾られているひいおばあちゃんやおじいちゃんの遺影よりも色がくすんでおり、軍人のような服を着ている。おばあちゃんに誰か聞いてみると、「戦争に行った羽那のひいおじいちゃんだよ。」と言われた。そんなはずはないと思った。なぜなら自分の知っているひいおじいちゃんと違ったからだ。幼い頃に亡くなってしまったので記憶にはあまり残っていないが、東京の病院まで会いに行き、病室のベッドで横になっているひいおじいちゃんの姿は今でもはっきり覚えている。だから、この遺影に写っているのは「知らない」ひいおじいちゃんだ。

小学五年生の時、歴史の戦争に興味を持ちはじめた私に疑問が湧く。

そういえば、戦争に行ったという「知らない」ひいおじいちゃんの遺骨はどこに行ったのだろう。そして、私の「知らない」ひいおじいちゃん一体誰なのか。私はおばあちゃんに聞いてみた。

すると、「知っている」ひいおじいちゃんと兄弟で、その兄だと言った。詳しく聞いていくと、「知らない」ひいおじいちゃんは、ひいおばあちゃんと結婚していたが、戦争に行き、フィリピンのルソン島で帰らぬ人となった。そこで弟が家の後継ぎとしてひいおばあちゃんと結婚した、ということだった。その人こそまさに私の「知っている」ひいおじいちゃんだったのだ。初めて聞いた時、なぜだか苦しかった。昔はそんなことも当たり前だったのかもしれない。でも戦争がなければ「そんなこと」も当たり前ではなかったと思うのだ。戦争によって、世間の風潮や価値観までもが変わってしまうということが、自分の中で信じられなかった。一人ひとりがきっとそれぞれの悩みを持ち、不安と、焦りと、悲しさをずっと抱えて生きていたと思うと胸が痛くなった。

中学2年の2月、修学旅行で広島へ行くことになった。

2日間にわたって資料館や、原爆ドームを見てまわった。特に資料館は心を打たれた。ボロボロになった服のように見える皮膚。石段に焼き付けられた影。原爆が落ちた時刻の時計。「行ってきます」が最後の言葉になった女子中学生の話。心が揺さぶられ、張り裂けそうになる。

戦場や治療されている兵士の写真を見てまわっている時、ふと戦争に行ったひいおじいちゃんが頭をよぎった。こんな地獄のような戦場で、家族のため、お国のためと戦い続けた強いひいおじいちゃん。きっと家族に会いたかっただろう。家族と幸せに笑って暮らしていたかっただろう。

想像すると、涙が出た。

戦争なんてなければ。初めから争うことは悲しみしか生まれないと分かっていたなら。そんな思いもすべてまとめて私は、私達は、戦争で亡くなったすべての人の思いを背負って生きていかなければならないと思う。たった数十年前に起きたこの悲惨な「現実」を「過去」として風化させないために。

そして、私はいつかひいおじいちゃんが亡くなったルソン島まで行き、ひいおじいちゃんにお花を手向けたいと思う。